慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（二）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.243(85)- 259(101)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

洵にBonarの所言の如く「マルサスのゴドヰンに對する論難は修正を經て疑も無く後者に接近せしむるに至つた。蓋し萬人悉く結婚に關し完く愼重に且つ自制を行ふものと假定せば、平等の狀態を持續する事の可能なるを承認せし爲である。乍併、「政治的正義」に對する批評としての「人口論」の要旨は別の點に存在する。即政治的制度は苦痛貧困の唯一原因にあらず、否主たる原因にすらあらずして、却て個人こそ其自由放任に委せらるゝと或は國家の抑壓を蒙るとに論無く、其情欲に耽溺する結果吾れと我身の苦痛貧困の因由を爲すものと云ふに在る。マルサスがゴドヰンに與へたる書簡の一節に「人口過剩より發生する慘禍を防遏せんが爲には深慮Prudence の必要なる事を認容したのは、公共の制度に對する是非を轉じて個人行爲の是非に向はしむるものである。而して假令殆ど最惡の形態に於る政府の下に在りても、其處に多少の競爭の自由が存するならば勞働階級は結婚を抑止し、隨つて其人口を減少するに依り忽ち其境遇を改善し得可く、是に反して最善の形態に於る政府の下に在りても、結婚に依つて人口を盛に增加せんか彼等は直に其境遇を惡化する事必定である」と云つてゐる。吾人は是に加ふるにマルサスは此所謂深慮を以て、人類に直接且つ確實なる利益を提供し得るものと看做し、之を以てかの政治的正義に適應するが如く人類を完全に改造する事の迂遠にして又比較的不確實なる利益と相對峙せしむるものなるを附言したいと思ふ」(Bonar: Philosophy and Political Economy 2nd ed. pp. 207-208)。Bagehot が道德的抑制の追認を以て「人口論」初版に對する論理的自殺であると斷ずるのは半面の眞理を道破してゐる。乍併同時に他の重要なる半面を看過するの觀無きを得ない。ゴドヰンは私有財產制度を以て人類の完全性を蔽ふ劣惡極まる制度であると主張しながら、尙此惡制の中に在つて理性の啓發を完成し得るものと確信した。彼はそれ程に人性の樂觀論者であつた。マルサスは多大の危惧を包藏し乍らも兎に角道德的抑制と云ふ唯一の光明を見出した。然も彼は間接に之を刺戟する所の私有財產制度無しには到底其效果を期待し難きものと思料した。それ程彼は人性の悲觀論者であつた。而して又是れ有るが爲に「人口論」は爾來長年月に亘つて一切の共產主義的或は集產主義的社會改造の企劃に最も勢威有る一障碍を與へ、資本主義經濟組織の謳歌者に最も有利なる一論據を提供するに至りしものである。

以上私は成可く批判的態度を回避して唯マルサス「人口論」の骨子を如實に摘記する事に力めた。固より此他に多量の脾肉があり、而して事實此脾肉を看過せるが爲に屢々誤まれる搏擊を誘致したのであるが、そは最後の「人口論」批判の章に於て自ら論及の機會に逢着するであらう。是に先立つて少時、「人口論」の根柢を培ふマルサスの哲學思想に一瞥を與へねばならぬ。

備考
トーマス・マルサス論
（第一章、「政治的正義」と「人口論」前號所載）
（第二章、「人口論」の原理と政策（本號所載）
（第三章、「人口論」の哲學思想（次號所載）
（第四章、「人口論」批判

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（二）

奧井復太郎

五　ジョン・ラスキンの生涯は普通一八六〇年を境

とする美術批評家としての時代と同年以降の社會批評家としての時代の二期に區劃されてゐる。E. T. Cook 氏の The Life of John Ruskin は此の區別に從つて第一第二の兩冊に分たれてゐるし、W. G. Collingwood の The Life and Work of John Ruskin もラスキンの生涯を四期に區劃するもの丶（即ち、Book I.—The Boy Poet (1819-1842) Book II.—The Art Critic (1842-1860). Book III-Hermit and Heretic (1860-1870)、Book IV.—Professor and Prophet (1870-1892)）一八六〇年を以つて其の著書を前後二卷に分けてゐる。勿論人の思想は決して瞬時的に大變化を來たすものではない。Changeableness と云ふ事は往々にしてラスキンの思想に加へられる批評であり非難ではあるが彼の思想の變化は彼自身の既に云へるが如く（Preface the Modern Painters, vol. v., quoted by E. T. Cook in The Life of J. R. vol. I, p. i.）一個の生長(growth)とも看做す可きものであつて此の點に關する Marshall Mather の觀察は次の如くである『彼は決して最初の主義主張を捨てた事はない——疑ひもなく其等を漸次正して行つたのだ。そしてぼんやりとした理解から漸次完全なる、且つ堂々たる識見に移つて行つたのである。．．二十年前には屢々「ラスキンの矛盾」と云ふ事が云はれた、そして所謂彼の前後撞着なるものは皮相的の讀者の哄笑、嘲笑を買つたものであつた。然し最高の堅實性は前後の撞着を生ずる。最大の敎導者が二度目の著述をする場合には以前よりも多く觀察し、更に多く云はんと欲するものを有するからして二度同じ樣な著述を反覆する事は出來ない。．．．．』（Ibid., Introductory note to fith edition, p. xi.）

故に一八六〇年以降のラスキンの思想は既にその以前の彼の生涯に屢々現はれて來てゐる。筆者も既に極めて簡單ながら嘗てラスキンの奢侈論を紹介した時に此の點に就いて一言しておいた。（本誌大正十一年五月號九一—二頁參照）從つて丁度一八六〇年頃に生涯の變轉期を持つたと云ふ事はラスキンの生涯の如き大冊に亙る傳記を書く傳記記者にとつて極めて便宜な方法である尤も Cook 氏は更に其れ以上の理由を彼のラスキン傳の緒言に擧げてゐる。

『ラスキンの生涯並びに彼の影響の過程は珍らしい程適切に彼の傳記を二冊に分割するのに役立つてゐる。出生より一八六〇年迄、一八六〇年よりその死までに亙る二冊は彼の歷史の二卷に相當する。一八六〇年と云ふ年は一つの分岐線を爲してゐる—此の年代以前は美術に關する著述家であつたが此の年代以後は又經濟學に關する著述家ともなつた。．．．（Cook 氏はこれに續いで既に述べた樣に人の生涯や思想が全く防水隔室の樣に隔てられてゐるものでないと云ふ事を述べてゐる。）．．一八六〇年以前はラスキンは美の世界の解說者として其の主なる活動を爲してゐたが同年以後は主として世界を改造す可き使命を果す爲めに熱中してゐた。然も社會に於ける彼の名聲も此の彼の興味の區分と相一致してゐた。此の傳記の第一冊はラスキンが最初は多少の偏見と戰ひながらも漸次味方を得ながら一般的承認を獲得するに至つた經過を示すであらうが其の第二冊に於いては吾々は彼が嘲弄せられ、或は最後に於いて或る者によつて一層稱賛せられ尊敬せられはしたが又一層疑惑と混亂との焦點となつてゐたのを見出すのである。第一卷は華かなる連續的成功の記錄であるが第二卷は明白なる失敗の記錄である。』（The Life of J. R. vol. I. Introductory, xxiv-xxv）更

に Cook 氏は兩時代の對照として一八六〇年に至る迄の年代はラスキンの生涯に於いて大部分秩序のある必然的發展と考へらるゝものであつたが一八六〇年以降の生涯は寧ろ之れと非常に趣を異にしてゐる　彼は『私の老年時代は本當の所青年時代である』(My old age is really youth) と云ふラスキンの言葉を引用してラスキンが老年に於いて、寧ろ賢明愼慮と思はる可き慣習や思想の抑制から全く逃れて、往々青年時代にのみ屬する樣に考へられてゐる、より頑强なる挑戰、より敢斷なる企圖の世界に轉じた事を述べてゐる (Ibid., Intro. xxv and p. 2)

併し Cook 氏もラスキンの生涯及びその著作の全般を通ずる統一に就いて述べた後で次の樣に述べてゐる。

『ラスキンの美術に關する著作には、彼が美術と生活とを結びつけてゐたによつてなほ大なる注意を拂ふ價値がある。社會經濟に關する彼の著作は其の中に美術の貢獻と云ふ事が含まれてゐるが故になほ一層廣汎なる基礎の上に立つものである。而して多岐に亙る敎義、熱誠、著述の下に一貫して彼は同一の理想を追及し、同一の信仰を諄々と說いた。其は『愛と喜悅と贊稱との力を凡べて包含せる生活、其の生活を外にして他に富は存在しないと云ふ事であつた。』(Ibid., Introductory, p. xxv)

六

『若しも吾々がジョン・ラスキンの爲人、その天才及び彼の缺陷を知らんと欲するならば、吾々は先づ彼の幼時の諸關係が如何に異常の性質を帶びてゐたかを充分に認めなければならぬ』(Ada Earland—Ruskin and his circle, p. 17, and cf. Wingate—Life of John Ruskin, p. 13.)

又 Frederic Harrison は云ふ

『彼の親達は自分等の見解に基いて彼等の驚異す可き子供を啓發する事を以つて其の全生活の唯一の目的としてゐたが、不撓の意思を具へた、斯かる親達によつて永く中年に至る迄、かくも全然家庭の中に蹇けられ、育てられ、又その世話を受けた子供は餘り多くない。家庭の生活狀態、その出來事及び規律の影響を更に一層深く受けた思想、性質と云ふものも亦他に餘り多く存在してはゐない』(John Ruskin, p. 8)

ラスキン自からも兩親の性質、才能に就いて次の如くに云ふ。

『私に及ぼした其等の影響は其の當時並びに永く其の後の生活に亙つて他の如何なる外部の狀態即ち大學校時代や又は世間に於ける交友或は敎導者等よりの影響以上に重大なものであつた』(Praeterita, vol. I. chap. vii, § 140)

故にラスキンの傳記々者は普通先づラスキンの兩親と其の家庭生活に就いて筆を起すのである　筆者も以下其の例に倣ふて筆を進めよう。

E. T. Cook 氏はラスキン全集 (Library edition) 第三十五卷の緒言中に於いてラスキンの父母並びに彼の幼年少年時代の記錄に就いてはラスキンの自叙傳である Praeterita の中に語られた以上に補足する必要を見ないと述べてゐる。(Ibid., p. lxi) ラスキン自身も其の自叙傳の第一卷第五章九十六節に此の時代の出來事に關して彼以外の者は彼以上に語る事の出來ない旨を書いてゐる。たゞ此の Preaterita はラスキンが極めて自由に書き連ねたものであつて Cook 氏の前記 Library edition 第三十五卷の緒言によれば此のラスキンの最後の著作が一つの本として纏められたのは Professor Norton の勸めによるものであつて之れによつてラスキンは既に Fors Clavigera の中に時々書いた彼の過去の回想を自

叙傳として別冊に纒め樣と決心したのである。が其れはラスキンの希望し計畫してゐた通りに實行されないで終つた（同緒言五四頁參照）又Cook氏によれば彼の計畫に於いてもラスキンは決して自已の生涯の完全にして且つ系統的な説明を下さうとしてゐたものではなくて其の表題は寧ろラスキンが懷いてゐた此の企畫の規模が餘りに大でないのを語つてゐる。即ち過去の中から『追懷に價すると思はれる出來事や思想の梗概』を與へるものであつた。『ラスキンは既に Fors Clavigera を書いてゐる中にかゝる過去の場面が「穩かに彼の追懷に浮んで來た」事を認めてゐた。そこで今や彼は每日彼の過去に就いての一片を書き現はすのに着手し始めた……』（前揭書緒言五二頁參照）故にラスキンの生涯を手取早く知らうと試みる讀者にとつては此中に於いて「關係のある題目が私の心に浮んだ時にそれを書いて行けば私の歷史は結局最も完全なものとなる」と考へて機會のある時に必しも、年代順的の形式を踏まずに彼の生涯の出來事に就いて記錄する旨を斷つてゐる。（Praeterita, vol. I, chap. vii, § 148）併し目次に於いては各章何れも年代順に配列されてゐて、ラスキンの幼時からオクスフォード時代に亙る記錄は大體其の第一卷に包含されてゐる（勿論第一卷には祖先に就いての僅かの記錄と兩親に就いての充分なる記錄とを並せ含んでゐる）故に最も便利にラスキンの生涯を研究する方法はラスキンの評傳の權威を――E. T. Cook氏の評傳であるとかCollingwood著の Life & Workとかを――手引として彼の自叙傳を並せ讀む事であらう。筆者も大體此の方法に從つた者であり其他に參照した書物は本文の中に引用するに際して明白となるであらう。

の資料は極めて不適當である。著者自身が其の

七

遺傳と敎育（或は環境）とは大體に於いて一個人の性格、思想を決定するものと考へられる。此の意味に於いて M. Mather はラスキンの兩親の性格に就いての記錄を其の評傳の冒頭に置き更にラスキンの性格に對して三つの大なる構成的影響を區別してゐる。（John Ruskin, His Life and Teaching, pp. 1-4, p. 6.）ラスキン自身は其の自叙傳の中に境遇又は或る一つの出來事が其の人の性格、思想に與へる影響の輕重に就いて傳記々者が往々其の影響の意義を過重視する事を警しめ天賦の資性に就いて説いてゐるが（Praeterita, I, § 28）其の天賦の資性の發現は大いに其の人格の環境に依る所が多い。此の意味に於いて彼の兩親の性格、日常の生活狀態はラスキンの生涯の構成的勢力である。

『幼兒の頃も少年時代も彼は母に依つて敎へられた。學校に於いても彼は通學生であり然も學校生活は間歇的であつた。旅行する時でも兩親は一緒であつたし、彼がオクスフォードに住む樣になつた時でさへ彼の母は彼に附いて行つた』（E. T. Cook—The Life of John Ruskin, vol. I, p. 7. Cf. Cook's Library edition of Ruskin's Complete Works, vol. I. Introduction, p. xxiii.）

John James Ruskin と Margaret Ruskin に就いては吾々はジョン・ラスキンの自叙傳 Praeterita の第一卷第七章に彼等の子供の手になる記錄を見出す。Edinburgh のラスキンが同地に於いて相當の生活を爲し Dr. Thomas Brown などと親交のあつた事は既に前號に於いて述べた。其の子の John James Ruskin は其後商業によつて身を立てなければならない境遇にあつたけれど

も可なり文學的才能のあつた事はロンドンに赴いた彼に與へた前記 Dr. T. Brown の手紙（一八〇七年二月十八日附、―― Praeterita, vol. I. chap. vii, § 144―前號に於いて Dr. T. Brown がジョン・ジェームス・ラスキンにラテンの研究と經濟學の修得を書面を以わて勸めたと書いたが之れは其の書面である）の中に認められる。又ラスキンの父が美術上の趣味を可なり豐富に持つてゐた事は後の記述によつて明かになるであらう。故に Ashmore Wingate は彼を以つて『葡萄酒商としての商賣上の極めて鋭敏なる才能とあらゆる美を毫も倦まずに賞翫する力とを併せ具へた顯著なる性格を持つた人である』と書いてゐる。（The Life of J. Ruskin, p. 3.) Collingwood は次の如く書く、

『然し彼の商賣上の心痛は彼の文藝的趣味によつて救はれた。彼は美術を愛好し、古い型ではあるが水彩畫をよくした。又彼は文學を好み、古い優秀の文學者の著作を立派に朗讀した。古いと云つても Pickwick や Noctes Ambrosiance が出た時には其等を讃めた位であるから其れ程舊式な趣味でもなかつた。又彼が蘇格蘭や西班牙を旅行した時に其等の地の風景や建築を愛した。然し彼は殆ど何處でゞも又どんなものにでも興味を見出しうる人であつて、實際的な判斷力がロマンティクな氣質と一緒になり、強い感情と意見とが廣い同情に結び付いてゐた氣のよくつく人であた。Copley や Northcote の描いた彼の肖像は鋭敏な、上品な、何づれも一個の紳士の風に具はる容貌を懷はせる。』（註一）（The Life and Work of J. Ruskin, vol. I, p. 11)

然しラスキン自身も認めてゐる樣に家庭に於ける、殊にラスキンに對する關係に於いては勢力を持つてゐた。（自叙傳第一卷第一章、第二十節、第二章第四十一節參照）Ada Earland は此の事を次の如く述べてゐる。

『ラスキン氏は穩かな性質の人であつた。彼の妻の良き判斷に強い信念を持つてゐたが、それとも彼女のより強い個性の力に服從したものか、兎に角彼は生活上より重要なる諸問題に關しては彼の意見を曲げてしまふ彼女の勢力を許してゐた』（Ruskin and his circle, p. 15)

勿論彼女が未だ Miss. Margaret Cox として Croydon より Edinburgh の叔父の家に家政を執りに赴いた事や彼女が從弟の John James Ruskin の有力な話相手であつた事を知る者は家庭内に於ける彼女の勢力に就いて右の見解を容認するであらう。ジョン・ラスキンは其の自叙傳の一章に於いて可なり詳しく此の母の事を述べてゐる。（第一卷、第七章一四〇、一四一各節參照）然しラスキンは此處では寧ろ彼の母の文學的才能に就いて、記述してゐるのであつて Croydon の Mrs. Rice の經營してゐた田舍の學校出の彼女が其の子供に聖書なり Scottish paraphrase なりを正しく敎へる事が出來る樣になつた由來を述べてゐるのである、（同一四二、一四六節參照）彼は又別の箇所で彼の母と其の妹即ち Croydon の叔母とを比較して左の樣に云つてゐる。

『其處で（Mrs. Rice の學校）私の母は福音主義的の規律を敎はり學校での模範生徒となり一番上手な裁縫婦となつた。所が私の、叔母は全然此の福音主義的の規律を顧みないで學校の厄介物（plague）となり又寵兒となつた。

私の母は少なからず誇る心を持つてゐたが秀でた才能を持つた少女であつて、其の全く謹慎的な行爲に於いては益々模範的となつた。が、

より多くの機智と、より少なき誇と何等道念を持たなかつた彼女の妹には非常に愛されもしたが又笑はれもした。』（自叙傳、第一卷第一章九、一〇節）

Ada Earland は彼女に就いて次の如く書く。

『彼女は不屈の意思を持つた女であつて嚴格な福音主義的見解を懷いてゐた。彼女は自負的であつて友達も多くなかつた、そして彼女自身の家庭以外の生活とは全く離れて、貫き進む事の出來ない隔意の障壁の彼方に閉ち籠つてゐた。恐らく、彼女は其の夫よりも四歳の年長であつたし又彼女が低い社會の中に生活してゐたと云ふ事を病的に氣にしてゐた故に、家族關係以外の者と親密になる事を好まなかつた彼女の心底には無意識ながら嫉妬の感情があつた。』（前掲書一五頁）

又 H. Harrison は次の如く云ふ

『彼の母は秀でたる才能と不撓の意思と烈しい性質と殆ど沈鬱なる宗教を持つた女であつた。』（前掲書、八頁）

然し Collingwood は之等に較べては一層同情ある見解を下してゐる。

『彼女の友達が少なかつたと云ふのは彼女の持つてゐた偏狹な Puritanism の爲めではない。彼女の道德觀とか信仰とかは其の關係する範圍內では極めて嚴格なものであつたらうが尙ほ彼女に生活の享樂と娛樂とを許してゐた。況してや皮肉家とか人間嫌ひとか云ふ風は更に無かつた。唯彼女は世間的地位で彼女より上の者に御世辭を云ふ事の出來ない誇を持つてゐたし又性格の點に於いて彼女と同等以外の者（其れはあまり多勢は居ないものだが）には容易に近寄られなかつた。かくして普通に面識を得た者は彼女にとつて不利益な見解を持つ事になつた。殊に若い者からは彼女は後年好かれるよりは恐れられた。然し彼女と交際を結び得た者は僅かではあるが其の人達には彼女は眞實な價値のある友人であつた。』（前掲書第一卷一二頁）

要するに是等の種々な見解は何づれも主としてラスキンが其の自叙傳に於いて述べてゐる所に基いてゐるものである。がラスキンの兩親に對する性格其の他の觀察は彼等の生活やラスキンに對する態度を語る內にもつと明白に現はれて來るであらう。從つて其れを待つて吾々はラスキンの兩親の資性に對する批評を定めるを以つて妥當であると信ずる。

註一　Collingwoodの引用文中に述べた John James Ruskin の肖像畫中 Northcote の描いたものは E. T. Cook 氏の編纂になるラスキン全集（Library edition）の第三十五卷（即ち Praeterita）の一二六頁の所に Margaret Ruskin の肖像と並んで載せられてある。同書には更に別の肖像が載せられてあるが之れは Sir Henry Raeburn の筆になるもので前記のよりも更に若い時ので同書一六頁の所に之を見る事が出來る。

又ラスキンの父の水彩畫に關してはラスキンの自叙傳中其の第一卷、第一二節と第四二、四三節の二個所に其の記錄を見る。詳細は其の個所に就いて參照を乞ふ。

又ラスキンは商人と云ふものに對して餘り好感を懷いてゐなかつた。既に昨年の本誌上でラスキンの奢侈論を紹介した時彼が富の追求に對する近代の人々の態度に奮慨を感じてゐる旨を述べておいた。（三田學會雜誌第十六卷第六號六九頁）商人に對する態度は明確に彼が自叙傳の一節（第一卷第一四九節）に書いてゐる。又之れと同樣な口吻は同書同卷中の第一一八節に於いて Robert Cockburn の二人の子供に就いて述べてゐる所に現はれてゐる "Both in business with their father, both clever and energetic, but both distinctly resolute—as indeed their parents desired—that they would be gentlemen first, salesmen second: a character much to be honoured and retained among us, nor in their case the least ambitious or affectionate: gentlemen they were,—born so, and more at home on the hills than in the counting-house, and withal attractive enough to their business."

八

ジョン・ラスキンは以上述べて來た樣な兩親の

性格、趣味からそれぞれ異つた二つの影響を受けた。彼が父親に負ふ所のものは美術に關する興味又は知識であり母親に負ふ方面は彼女の持つてゐた evangelical puritanism から生じた教育の方面であつた。Cook 氏は『若いラスキンが生活して來た零圍氣は斯くして淸教徒的であると共に又美術的のものであつた。そして此の結合が彼の生涯の著作全體の色彩となつてゐるのである』と述べてゐる。(The Works of John Ruskin, edited by Cook, Library, edition, vol. I, Introduction, p. xxiv) 從つてラスキンに及ぼした兩親の影響は當然順序的に見れば母親のそれが先づ述べられなければならない。

ジョン・ラスキンが一八一九年二月六日に Hunter Street で生れた時は彼の兩親は最早餘り若くはなかつた。母親は其の時三十八歳であつたので『九十年以前に行はれてゐた子供の養育法の嚴格な訓育も此の場合寬にされるだらうと想像せられるであらう。然しさうでなかつた。』(Ada Earland,—Ruskin and his circle, p. 15.)

既に述べた樣にラスキンの母は極めて不屈の意思を持つた婦人であつたが『其の子供の教育に對しても此の不撓不屈の態度を採つた、最も偏狹な宗派に屬してゐた此の evangerical Puritan の彼女は子供の玩具に就いてすら罪を作るものだと云ふ强い意見を持つてゐた。一連の鍵と一つの積木箱とがラスキンの幼時に於ける此の方面の全部の支度であつた。一人の叔父が Soho のバザアから眞赤な色や金色にピカ〳〵した Punch と Judy の人形を買つて來て彼に與へた。彼の母は直に其れを何處へやつてしまつて彼は二度と此の人形を見なかつた。』（註一）(E. T. Cook-The Life of John Ruskin, vol. I. p. 7.) ラスキン自身は母の態度を自叙傳で次の如く書いてゐる

『私の母が先づ子供を躾ける一般的の原則は堅實の注意を拂つて凡べての避け得られる苦痛や危險から私を護つてくれると云ふ事であつた其の他の事に關しては私がむづかつたり世話を燒かせたりしなければ私の思ふ儘に遊ばせておいた。併し遊び事は自分自身見出すと云ふのが其の規則であつた』(Praeterita I, Chap. I, § 13) 又斯の如き躾け方に對してラスキンは同書で次の如き觀察を下してゐる。

『此の餘り澤山でない、併し私は今でもそう思つてゐるが全く充分であつた持物と、又私が喚めいたり言ひつけ通りにしなかつたり楷子段で轉がつたりして常に鞭で打たれたりした事から私は直に落着いたそして又安全な生活や動作の方法を覺へてしまつた。』(Ibid., § 14)

Hunter Street の家では尙ほ他にラスキンの幼ない興味を惹くものがあつた。彼は自分の毛氈の色を比較したり床板の木目を檢べたり向ひの家の煉瓦を勘へたりしてゐたが更に彼を喜ばした物は家の外の所で丁度撒水夫が車に水を補給する光景であつた (op. cit, § 14) 斯の如き生活の習性は四歳のラスキン (at three and a half) を描いた畫家 Northcote をして此の歳の子供がジッとしておとなしく座つてゐた事に就いて非常に喜ばせた。そして此の畫家はラスキンの兩親に彼の製作のモデルになつて貰ひたい旨を希望した。註二 (op. cit, §§ 14, 15) ラスキンが其の時他の肖像畫の背景として希望を此の畫家から尋ねられた時に『靑い岡を』と答へたのは彼の後年を忍ばせる話として著名である。(此の挿話に關する彼自身の見解は自叙傳の前掲所—十五節に書かれてゐる)

然しラスキンの母の嚴格なる態度は單に子供

の遊び事にのみ限られなかつた。喰物についてはたつた三つの干葡萄を或る時與へられた事が五十年後のラスキンの此の點に關する唯一の回想であつた。(Praeterita I, § 23) 又彼には遊び仲間と云ふものがなかつた。彼の母は極めて社交的生活を嫌つた從つて彼女が子供の交友に就いて何等かの努力を示すと云ふ事は期待しう可くもない。Cook 氏はかう云つてゐる。彼の兩親は何づれも交際を避けたが其の子供にもかくあらん事を期待してゐた。勿論ラスキンにとつて Croydon の叔母の所に赴き Wandel の泉の傍で遊んだ事やスコットランドの伯母の所へ行つて Tay 河に向つて傾斜してゐる庭で伯母の子供と暮した事はラスキンの生涯中の可なり愉快な日であつたに相違ない。然し『The Springs of Wandel も The Banks of Tay も皆一時的の喜悦に止まつて彼の幼時の大部分は友達もなく Brunswick square の樹木を斜に眺めるとか、向ひ側の waterstand の水汲人を眺めてゐるによつて得る以外に其れ以上の面白い眺めはなかつた』(Cook—The Life of J. R., vol. I, pp. 8-9)

一八二三年ラスキンが四歳の頃（日本流に云へば五歳の頃）ラスキン一家中 Hunter Street から Herne Hill へ移つた。Herne Hill の家に就いては Cook 氏は次の如く書いてゐる。

『其時分は澤山の樹木に取り圍まれたかけ離れた屋敷であつて屋根裏の部屋の窓からは一方には Norwood の丘岡を他方には Thames の谿谷を望む素晴しい景色を見渡す事が出來た。今でも殘てゐるこの家は約八十年以上に亙つて—其の間には少しの中斷であるけれども——ラスキン及び彼の回想とに關係を持つてゐる。彼は此の家に兩親と共に二十年間住んだ。其後暫時面識のない人に貸されてゐたが一八七二年にラスキンは彼の從妹の Mrs. Arthur Severn と其の夫に借地權を讓つた。彼等の借地關係は一九〇七年まで續いたが其の間ではラスキンの古い小兒室は晩年になつて彼の爲めの寢室と定められてゐた。彼が一八八五年彼の少年時代の追想的自叙傳に序文を書いた所は此の室であつた』(E. T. Cook-The Life of J. R. vol. I, p. 9)

Herne Hill に就いてのラスキンの回想は Praeterita 第一卷第二章 (Herne-Hill Almond Blossoms) の全部が其れである。ラスキンの敎育や旅行等の記錄に入る前に先づ此の地のラスキンに及ぼした點に就いて暫く述べてみやう。先づ喜びの對象が毛氈から庭園に變じた (Cook)

『ラスキンは茲で彼の喜びであつた撒水車の代りに彼は觸れる事を許されなかつた果樹を澤山に植え込んだ純田舍風の庭園の中を歩き廻る悦を得た。Hunter Street で退屈な時間に修得した觀察力は茲でより廣い領分を見出した。彼は昆虫や鳥や石や草花を觀察したり、其の構造や生活に好奇心を寄せ、又既に是問題に就いては彼自身の理論を構成すると云つた樣な點に興味を見出した』(Ada Earland—op. cit., pp. 21-22.)

故に Collingwood は自然の愛とラスキンとの關係に就いて『彼はロンドンの眞中で生れはしたが都會で育つた人間ではなかつた。風景に對する彼の愛は其の愛を後になつて發見したのによるものでもなく又多くの場合に見る樣に市街と亦裸々の自然とを熱心に比較した結果によるものでもない』(The Life and Work of John Ruskin, vol. I, p. 17) 又 Herne Hill に於けるラスキンに就いては『斯くて彼は都會には其の利便を受くるに適した位近い所で、又毎年の夏西部の河川の風景や北部の山嶽地方を度々訪れ

て、より感動的な自然の風光に常にもの新らしい氣分を見出しうる程是等の場所から離れた地に、殆ど田舍の少年の樣に育てられたのである』(Ibid., p. 19) A. Wingate もラスキン一家が其の毎夕を Herne Hill の庭園に出て過した事を述べて『斯くて若きジョン・ラスキンは郊外に生活する大部分の居住者よりも遙に澤山の、大空や鳥や花の魅力及び驚異を眺めた』と書いてゐる。(Life of J. Ruskin, p. 8.)

Herne Hill の屋敷が非常に樹木の多い所であつた事は既に述べた通りであるが、其の前庭は常綠樹を植込み其の後庭は又立派な果樹で充たされてゐた。幼いラスキンが觸れる事を禁ぜられてゐたのは此の果樹であつた。ラスキンは此の庭園とエデンの園とを比較して此の庭には仲間になる野獸が居ないのと「凡べての果實が禁ぜられてゐた」點以外では彼にとつて樂園のあらゆる目的に適ふたものであつたと述べてゐる。(Cf. Praeterita, I, § 39)が彼は『此の果樹の列樹路によつて私に與へられた純眞な、永續きのする悅は其の實のりの時でなくて花の咲いた時に求められた』と記してゐる (Ibid., § 59)而して正に是等は Herne Hill に於ける『健全なる喜樂』の一部を爲すものである。

然し筆者は今や他の方面を語らねばならぬ。其れはラスキンの家庭生活の內部と母の敎育とに就いてゞある。

註一　ラスキンは此の外に二輪馬車と、毬とを持つてゐた。勿論一時にではなく是等のものが全子供時代の玩具の總計であつたのだ。

Punch と Judy を與へた叔母は勿論 Croydon の叔母である。『此の點(玩具の少なかつた事)に關する私の修道院的乏しさに對して Croydon の叔母の同情は非常なものであつた』この人形はラスキンの誕生日に與へられたのであつてラスキンは叔母のこの贈物に就いて次の如く書いてゐる。

"I must have been greatly impressed, for I remember well the look of the two feagures, as my aunt herself exhibited their virtues."

更にラスキンの少年時代の玩具に關しては Praeterita I § 64 を參照せよ。

註二　Northcote によるラスキンの肖像畫は Library edition の Praeterita (全集第三十五卷) の二十一頁に挿畫があり同二十二頁には同畫家がラスキンの顏をモデルにした製作が載せられてある。

近世初期の英國株式會社に對するスコットの觀察(下)

高木壽一

(四)

茲に於てスコットは「國富論」中何れの部分よりも劣れりとするアダム、スミスの株式會社論に對する論評に入る。

スミスは彼の所謂「眞摯聰明なる、The History and Chronological Deduction of Commerce の著者アンダーソン」(Wealth of Nation (ed. Cannan) II, p. 235)により不完全なる論據より誤れる推定をなせる以外には唯 Morellet に據れるのみである。(Ibid. p. 246)斯くて此問題に對するスミスの研究は其歷史的なる限り、アンダーソンに據れることによつて當然不完全なるものである。尙此不充分なる資料は、善用せられしや否や疑問とせられ得るも、殆どスミスは其典據より株式會社に不利なるべき資料を選びたるかの如くにして、殆ど東印度會社に對する憎惡なりと思はしむる少數の章句がある。

而して、國富論の研究の順序に從へば、先づ第一に獨占に關する諸外國貿易株式會社の地位である。若し斯る貿易が諸會社の特權によりて價格騰貴を含み、又之等の產業が公開貿易(open trade)によつて遂行し得しならば、先に擧げし